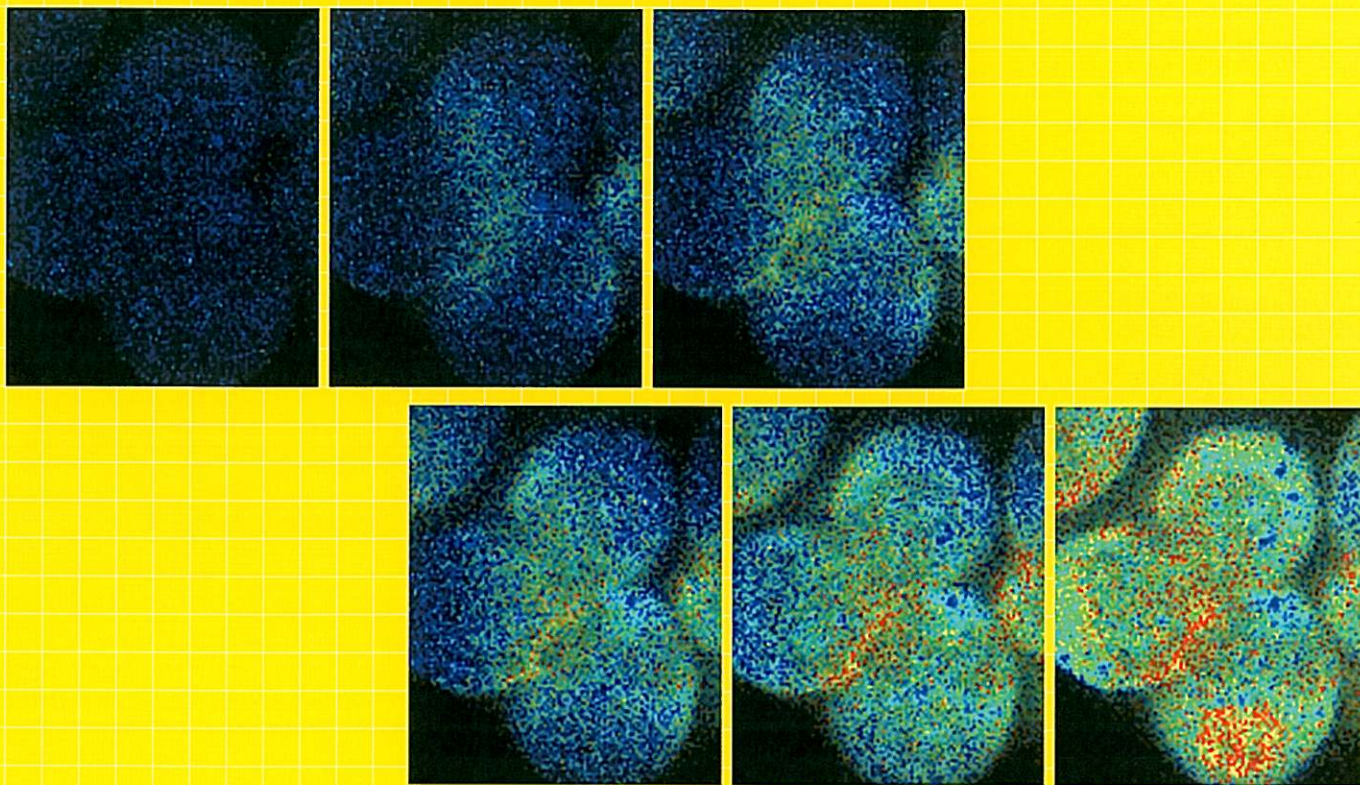


# 日本歯科評論 8

THE NIPPON DENTAL REVIEW

August 2011 No.826 Vol.71(8)



北海道医療大学歯学部 薬理学分野  
谷村明彦先生・東城庸介先生 <私の研究室から>本文9頁

〈特集〉

## 義歯を活かすインプラントの有効な使い方

大久保力廣・鈴木恭典・飯沼 学・亀田行雄

“DH”あなたの出番です!

シェーグレン症候群の患者さんを担当して——私たちができる支援を精一杯したい

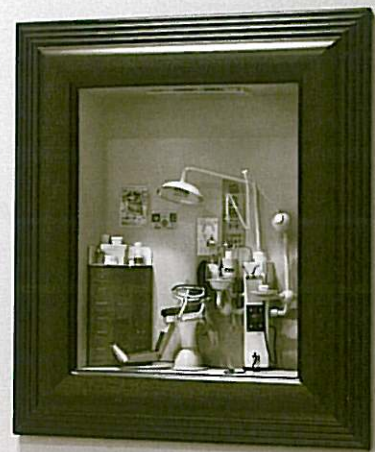
塚越芳子・渡部裕之



# 女医を育てた 奈良時代の医療制度

なかはら えつお  
中原 悦夫

医療法人社団協立歯科 クリニック デュボワ  
〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-1-1 帝国ホテルプラザ4階



最近，“〇〇県女性歯科医師の会”や“女性歯科医師のための……”など、女性歯科医師だけの集いやその活動報告を目にする機会が増えている。女性医師においては「国際女医会」(46カ国)に加盟している「日本女医会」のように、100年以上の歴史を持つ国際的組織もすでに存在している。日本歯科医師会も「女性歯科医師の活動に関する検討委員会」を柱とした都道府県歯科医師会男女共同参画推進検討会議を開くなど、歯科界のジェンダーに関心が高まっているようである。

## 日本最古の女医の育成

奈良時代の東大寺は僧侶のための総合大学であり、建築や土木、そして医学も教授され、当時は御殿医も僧侶が担っていた。そのうえ驚くことに、律令制に基づく医療制度の中には“女医を育成する制度”が特別に設けられていたという。

数年前、NHKで韓国の歴史ドラ

マ「チャングムの誓い」が大変な人気を集めたが、それは16世紀の朝鮮王朝において、幼少から宮廷に仕える賤民の奴婢出身で歴史上実在した女医チャングムの生涯を描いた内容だった。お隣の韓国には、すでに当時の日本ではなくなってしまう女医を育成する制度が16世紀まで残っていたのである。

東大寺長老の森本公誠氏によると、奈良時代の当時の法律「大宝律令」の医疾令十六条には、「国家に帰属する女性のうち15歳から25歳までの頭のよい者30人を募集して内薬司の側に別院を造って住ませ、産科をはじめ、内科、外科、針灸の一応の医療をそれぞれ専門の医師が医学書を読ませることなく口述で教育し、毎月医博士が試験し、年度末には内薬司が試験して、7年以内に修了させる」という内容が定められている。韓国と同様に日本も賤民の奴婢出身、つまり、読み書きの教育も受けることのできない貧しい家に生

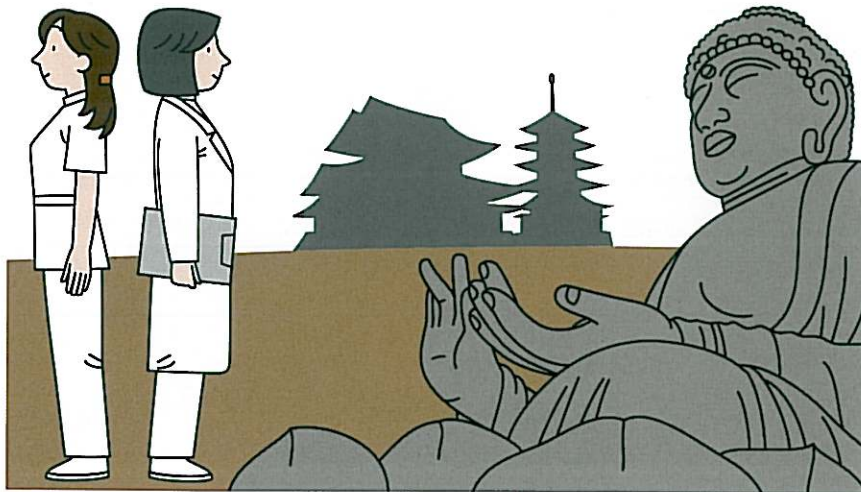
まれた女子を女医として育てている。さらに、彼女たちが医学書を読めなくても修業ができるよう、口述で教えることを法律で定めている。

なぜ、日本や韓国では貧しい家に生まれた女子を女医として育ていく制度ができたのか、非常に興味深い。そもそも当時の医育制度や医療行政は意外に進んでおり、学業を及第した成業者には上・中・下の3段階の成績が付けられていた。

716年5月に「学業を及第した成業者でもないのに国博士や医師への推挙を求めるような者は今後補任することはまかりならぬ」と勅令が下っているところを見ると、いつの世においても親のコネを悪用した不心得な学生がいたことを思わせることから、現在と同様に成業にはかなりの能力が要求され、医師の社会的地位も高かったと推測できる。したがって、決して女性医師の地位が低かったわけではない。

また、聖武天皇は医療行政にさま





ざまな新しい方針を打ち出し、光明皇后は実家の藤原家の財力を利用して、貧しくて医療が受けられない人々に医療を施す施薬院と孤児のための悲田院を造っている。皇后は、らい病患者の背中の膿を口で吸ってあげたり、患者を湯屋に入れて垢を落としてあげたりした言い伝えがあるほど国民から慕われていた。これが日本で最初の“福祉医療”である。

### 女医の育成や福祉医療が芽生えた思想的背景

奈良時代の日本が世界に誇れる素晴らしい国であったことは史書からも明らかだが、特に貧困層への福祉医療を推し進めたり、女医の育成を制度化したり、さらに貧困層女子への医学教育の機会を与えて社会で活躍させたりした点は、現代の福祉医療と比べても何ら見劣りするものではない。現在の日本における皆保険制度の精神的原点は、この時代に遡ることができるのかもしれない。

まだ想像の域にしか過ぎないが、当時、すでに女性のジェンダー問題をも制度において克服しようと試みていたのかもしれない。なぜなら8世紀は東洋文明の最盛期であり、律令国家誕生の背景にそれを窺わせる思想的背景があるからである。

聖武天皇は当時、天災や飢餓や天然痘の流行で疲弊した国土を建て直すため、国家プロジェクトとして国分寺を全国に建立し、その中心に東大寺の大仏を据えた。国分寺の思想的根拠は「金光明最勝王経」である。これは“国を治めるにはどうしたらよいか”と思い悩む国王のために説かれた教えであり、律令制による官僚の階級社会における統治、つまり“縦の社会”を基本思想としていた。

しかし当時の国際情勢は非常に緊迫しており、周辺国を冊封体制に組み込もうとする唐の勢力に対する外交におけるさらなる心の拠り所が必要だった。聖武天皇はそれを「華嚴経」に求めた。この華嚴思想をわか

りやすく言えば、SMAPのヒット曲「世界に一つだけの花」の歌詞そのものだ。“大きい花、小さい花、いろいろあるけれど、みんな一つだけの花……”と同様に、大国でも小国でもそれぞれみんな独立したひとつの国であり、対等な立場で外交に臨もうとするという、いわば横社会の公平性を説いて、さらには人類の救済を目指した。公平公正な福祉医療の実践や男女共同参画も、このような思想的背景があってこそ実践された行政だったのだ。

\*

日本の歯科医師の男女割合は今後、同数に限りなく近づくかもしれない。むしろ、男女の平均寿命差からすると将来は女性歯科医師数のほうが上回るかもしれない。歯科医師の仕事自体が変化しつつあることも踏まえて、当然、社会的・文化的な性のありようを問うジェンダーについても新たな議論の余地が生まれる。労働経済の視点から見ても、一般女性が20歳から定年まで働くことによって得られる平均所得はざっと約2億5千万円であり、その間、子育てに専念すればそのすべてが機会費用となる。女性歯科医師ともなればさらに大きな額になるろう。

子育ては貧しい時代には投資財であったが、豊かな時代では消費財になる。そのことを加味すれば、経済対策のみならず少子化対策としても、女性歯科医師の男女共同参画推進は重要性がますます高くなるであろう。